

「忘れてはいけないひと」

Run

校内に下校時間の音楽が鳴り響く

「今日はこれで終わりだ。明日の朝もいつも通りの時間に集合。それじゃあお疲れさま!!」

「お疲れさまっす!!」

午後7時を回ったところでキャプテンの笠松は体育館で号令をかけた。

今日も1日が終わった。けどウインターカップまでそんなに時間は残されていない。

夏休み前には3年の笠松は引退しなければならぬ。だがウインターカップだけは出場したい。どうしてもウインターハイのリベンジをしなければ気が済まない。笠松はそんな思いで皆が引き上げる中、今日もひとりコートに佇んでいた。

「黄瀬、1対1やらねえ?」

「先輩からそんな申し出なんてめずらしいッスね」

汗を拭いながらキラキラと輝くような笑顔が笠松に向けられた。

「嫌なら森山にでも・・・」

ところが黄瀬は鮮やかに笠松の体を壁と自分の間に挟み込んだ。

「嫌だなんて一言も言っていないじゃないッスか。それとも先輩は俺に勝てないからやめたんスカ?」

「てんめえ!調子に乗るな」

「痛てっ・・・先輩・・・」

間近に迫った端正な黄瀬の顔に迷わず両手で挟み込むようにピンタを食らわしながら笠松は黄瀬のガードから抜け出した。

トントンとボールを床につきながら笠松はニコッと笑う。

この人のこの悪戯な少年っぽいところが大好きだ。

黄瀬も微笑みながらそのボールを奪おうと手を伸ばす。笠松は器用に腕を回してボールを体の後ろに庇った。もう片方の手で黄瀬をガードする。

トントンという規則正しいリズムが時々早くなると黄瀬から体を引き離そうと笠松は走り出した。

それを黄瀬が追いながら一瞬の隙にボールを奪った。黄瀬はどこか見覚えのあるようなフォームでボールをバウンドさせながら鮮やかにゴールへと進んでいく。一方それを阻止しようと笠松は懸命に黄瀬にぶつかってくる。が、黄瀬は華麗な身のこなしで笠松を抜いていった。

「くそ！負けるもんか！！」点も取らせないぞ！！」笠松は口元を上げながら黄瀬に追いついた。黄瀬がジャンプしてシュートを決めようとした瞬間にボールを奪った。

「あつ・しまった」  
「ドンマイ」

黄瀬は見事ボールを奪われて今度はまた笠松を追っていった。

「俺だって負けないツス。だって俺はエースなんツスよね」

黄瀬は次第に本気になっていく。黄瀬のプレイスタイルは笠松でさえ掴みきれではない。

それでも笠松は自分に少しだけ自信がついたから黄瀬に挑んでみようと思った。本当は黄瀬の方が強いこと

は知っている。この男と対等に1対1 (one on one) をして勝つたことは一度もないのだから・・・

黄瀬が先回りすると急に立ち止まった。その弾みで全速力でダッシュしていた笠松は転がる。

「あつ！！」

「先輩！！」

笠松が転んでいく方向に小さな窓あった。この窓にはヒビが入っていてもう一度ぶつかれば確実に割れる。

だがこのままじゃぶつかる！！

その時、咄嗟に黄瀬は笠松を庇って前に出た。同時に2人は体育館の窓に激突した。

ガッシャーン！という大きな音がした。

笠松はいつまで経っても覚悟していた痛みがない。ふと床の上に何かが広がる気配がして目を向けた。

「・・・っ！！」

床が真っ赤に染まって黄瀬が倒れている。黄瀬の体にガラスが刺さったのか？

「黄瀬！！」

笠松は慌てて立ち上がると素早く職員室に走り出した。まだ誰か先生は残っているだろうか……

職員室に走り込んでドンツ！とドアを開けた。

「もつと静かに開ける、ドアが壊れる」幸いまだバスケ部の顧問の武内が残っていた。

「黄瀬が……黄瀬が怪我を……」

笠松は震えそうになる体をこらえながらようやくやくそれだけ伝えると、武内は笠松の頭に手を乗せた。

「黄瀬がどうした？どんな怪我だ起きられないのか？」

流暢な言葉に笠松はキツと睨んだ。

「早く救急車を呼んでください！！血が……たくさん血が出て……」

普段は冷静な笠松がうろたえる姿を見て流石の武内もただ事ではないと察したらしい。

携帯電話を片手に体育館へ走り出した。

「わかった。それなら様子を見ながら呼ぼう」

笠松も体育館へと引き返そうと思ったが、一度医務室に立ち寄って救急箱を手に、武内よりも一足遅れて体育館に向かった。

「今救急車を呼んだから。黄瀬のご両親って知ってるか？」武内の問いかけに笠松は首を左右に振った。

笠松は救急箱を持って黄瀬の側に寄ってみた。

その端正な顔は青白く瞼は閉じられたまま開く気配が感じられない。

まるで死んでしまったように動かないのを見て震える手で黄瀬の口元に手のひらを向ける。

僅かにかかる黄瀬の息に少しだけホツとしたがそれでも気は抜けない。

笠松の大きな瞳からポロポロと大粒の涙が流れ出した。

「笠松、泣いてる場合か」

武内が笠松にそう言うのと笠松は片手で涙を拭いた。そうだった、こんな時にメソメソするなんてどうかしてる。

笠松は黄瀬の血が出ている部分を探した。どうやら背中の中の肩あたりらしい。

とりあえず救急箱から止血帯を見つけるとそれで肩を止める。

止めている間でも黄瀬の体はぐったりと動く気配すらない。